米子地区全学共通科目・英語の授業の調査実施について

教養教育センター兼務教員　　小林（こばやし）　昌博（まさひろ）

１．調査の概要

医学部医学科は平成 20 年度より全学共通教育も米子地区において実施する体制となり、平成 26 年より米子地区における全学共通教育の実態把握の実施に伴い、英語の授業の実施状況も調査の対象となった。本稿ではこれまでの調査を概観し、米子地区における全学共通科目の英語の授業の課題とその改善状況、さらに今後の展望について簡潔に報告する。

２．米子地区における課題と改善などの成果

まず、平成 26 年に開始された調査によっていくつかの問題が明らかとなった。調査開始時、特に医学科 1 年の「コミュニケーション英語」においては、1 クラスの受講生の数が 50 名ほどであり、ペアワークの導入などコミュニカティブな授業を実施するには難しい状況であることがわかった。翌年には当該の「コミュニケーション英語」の開講コマ数を増やすことで少人数化を実現し、より学生に目が届く授業を実施することが可能となった。平成 28 年には湖山キャンパスの専任教員と米子キャンパスの非常勤を含むティーチングスタッフとのミーティングを持ち、学生のアンケート結果をフィードバックし、湖山キャンパスと米子キャンパスとの間の連携を図ることを確認した。医学科以外の医学部の学生は、1 年次は湖山キャンパスにて英語を含む全学共通科目を履修するため、英語教員による 2 つのキャンパス間の連携はカリキュラムの統一感を高めるのに貢献したと言えるだろう。平成 29 年には教授法の観点から新規の非常勤教員を採用して、新体制を整えることができた。令和 2 年度は新型コロナウイルスの影響により、米子地区を訪問し、授業参観を実施することができなかったが、オンラインで学生との面談を行うことで学生の声を拾うことができた。令和 3 年も同様にオンラインによる学生の面談を実施した。

３．今後の展開とまとめ

最後に、今後の米子地区における課題と展開をもってまとめとしたい。まず、保健学科と生命科学科の学生は、いまだに 1 年次は湖山キャンパスにおいて英語の授業を履修し、その後米子地区におけるカリキュラムに移行するシステムになっているために、授業内容やテキストの難易度などのキャンパス間の連携をさらに強化する必要があると感じる。学生との面談の中で、教員の教授スタイルとテキストの難易度について連携を求める声があった。次に、米子地区における英語教員の相互授業参観の定期的な実施の必要性をあげる。米子地区ではカリキュラム上、英語の授業は同一の日に実施されることが多く、また専任

教員も現在は 1 人しかいないため、相互授業参観をシステムとして取り入れることが難しい。録画などの実施を含め、教員間の連携を深めるためにも今後の課題として考えている。さらに ESP（English for Specific Purposes）を考慮したテキストの選定と教材開発の必要性があるだろう。学生の面談を通して、医療英語など、自分の専門に近い教材を用いた英語の授業を求める声がある一方、英語の授業においてはより一般的な内容を学びたいという声も少なくない。学生の需要が幅広くあることを踏まえて、どのような教材がどの科目で必要なのかを精査し、今後の展開へとつなげる必要があると思っている。